

台灣人日本語學習者の会話における副詞の使用に関する縦断研究

陳相州/Chen Shiang-jou

東吳大學日本語文學系 副教授

Associate Professor, Department of Japanese Language
and Culture, Soochow University

【摘要】

本研究針對先行研究所提及的學習者副詞多用問題，以縱斷的觀點來調查台灣日語學習者在日語會話內副詞的使用情況，並且釐清這些副詞在會話中有何使用特徵。本研究主要利用 LARP at SCU 語料庫，挑選其中兩名進大學之後才開始學習日語的學習者為研究對象，觀察這兩名學習者在日語訪談會話中副詞的使用狀況。

考察的結果，我們知道這兩名台灣日語學習者在三年半的調查期間使用在日語會話上的副詞相當集中，分別集中在「sou」「moshi」與「tabun」「sou」上。而儘管同樣是「sou」的副詞，這兩位學習者也有不同的使用特徵。此外，「moshi」與「tabun」這兩個副詞是在學習者日語中高級階段之後開始頻繁被使用於表示話者之意見，而我們也觀察到學習者用日語在表達意見方式之差異。

【關鍵詞】

台灣日語學習者 副詞 會話 LARP at SCU 語料庫 縱斷考察

A Longitudinal Study of the Use of Adverbs in Conversation by Taiwanese Learners of Japanese

【Abstract】

This study takes a longitudinal approach to investigate the use of adverbs by Taiwanese Learners of Japanese in their Japanese conversation, and to identify the characteristics of these adverbs in conversations. This study selected two learners who started to learn Japanese after entering university from LARP at SCU corpus and to observe the use of adverbs in their conversations.

As a result of the study, we know that the adverbs "sou" "moshi", and "tabun" "sou" are often found in the conversations of these two Taiwanese Learners of Japanese during the study period. Although the same "sou" was often used by both learners, the two learners had different features of usage. In addition, the adverbs "moshi" and "tabun" began to be used frequently to express their opinion at the Intermediate level and Advanced level, and we observed differences in their expressions.

【Keywords】

Taiwanese Learners of Japanese, adverbs, conversation, LARP at SCU corpus, longitudinal approach

1 はじめに

副詞とは動詞と形容詞を修飾するものであり、動きの行われ方や程度を修飾する働きをもつ（森山 2003）。主に修飾する働きを果たすものであるため、副詞を使わなくても情報の伝達に支障をきたすことはなかろう。しかし、副詞がないと、繊細な描写や微妙な感情は伝わらないと考えられる。

会話の場合では畠（1991）が述べたように、副詞は一種の「空白補充語」として、母語話者にはほとんど意識されないほど、空気のように必要欠くべからざる役割を果たしている。空白補充語とはいえ、日本語母語話者は会話の中で「しょせん」、「ぜひ」などの副詞を介して相手の会話の展開を予測し、理解すると考えられる。さらに、話し言葉の副詞は対人的・相互作用的な機能も担っている（中田 1991）。つまり、副詞は会話の進行上には欠かせない重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、石川（2020）は非日本語母語話者の会話で使用する副詞の量においても、質においても日本語母語話者といくぶん異なっていると指摘している。

例 1

T: いや、でも〈えー〉、ほんのギリギリまえ、ギリギリこんなになっても働いてる人いるよね？

S: うん、たくさん、ふん、たぶん 7、産むのときたぶん〈産むとき〉、えー、はちげ〈8 ヶ月〉、8 ヶ月くらいでたぶん帰って、でもえーすぐ、たくさん

（「LARP at SCU」、学習者 35 の 31 回のインタビュー）

例 1 は T（日本人教師）と S（台湾人日本語学習者）のインタビューの内容で、下線を施した語は副詞である。例 1 から、教師 T の発話に対して学習者 S の回答には、3 回の「たぶん」、2 回の「たくさん」と 1 回の「すぐ」が使われており、一発話に必要な以上の副詞が使用されていることが窺える。「たぶん」や「たくさん」などの副詞の使用数はもちろん、それらの副詞の使い方も不自然に感じられる。また、日本語の学習が進むにつれて日本語学習者の副詞の会話使用がどのように変化していくのかは未だ明らかになっていない。そこで、本研究では、台湾人日本語学習者が日本語の会話でどのような副詞¹を多く使用し、またその使用にどのような特徴が見られるかを縦断的に調査することを目的とする。

2 先行研究

日本語学習者の会話で使用する副詞を対象として考察を行った研究には、小寺（2001）、中俣（2016）、朴（2017）、島崎（2019）、石川（2020）、島崎（2020）などがある。以下ではこれらの先行研究を順次に紹介していく。

小寺（2001）はインドネシア語、スペイン語、シンハラ語、中国語、アラビア語を母語とする初級と中級の学習者計 6 名に OPI インタビューを行い、インタビューデータに現れた副詞を調査して分析した。その結果、6

¹ 副詞の認定は「Web 茶まめ」の形態素解析の結果によるものである。

名の学習者の副詞使用に共通性が見られ、多く使用された副詞は初級教科書の前半に提示されたものであり、「ちょっと」、「たぶん」、「いつも」のような使用頻度が高かった語には語彙や文型の乏しさをカバーするための戦略的な使用法が観察されたとしている。

中俣 (2016) は「日中 Skype 会話コーパス」を用い、中国語を母語とする学習者と日本語母語話者の使用語彙を比較したところ、副詞の使用には差が見られると説明している。また、副詞は学習者の使用は母語話者の六割にとどまる一方、母語話者はほとんど使用しない副詞「とても」、「一番」、「もし」、「あまり」もあり、ズレが大きいと結論づけている。

朴 (2017) は日本語学習者が多用する傾向にある話し言葉の副詞「とても」の使用を中心に、「名大会話コーパス」と「タグ付き KY コーパス」を用いて日本語母語話者と日本語学習者の使用上の相違点を明らかにしたものである。考察の結果、日本語母語話者と比べて日本語学習者の肯定用法での使用が圧倒的に多く、主節の形容詞述語と共起した例を多用する傾向にあったとしている。

島崎 (2019) は「多言語母語話者の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」の話し言葉タスクを用い、異なった言語 (韓国語、中国語、ベトナム語、英語、フランス語) を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の副詞の会話使用の実態を調査した。その結果、日本語母語話者にもっとも近い副詞の使用を行っているのは韓国語話者であるが、韓国語話者は母語話者に比べて「ちょっと」、「まあ」の過剰使用や「とても」などの過小使用の可能性があると述べている。

石川 (2020) は I-JAS の対話タスクを用い、12 種の母語背景を持つ中級後半の学習者と母語話者の副詞の使用状況を量的・質的に比較した。学習者の副詞使用量は母語話者と比べ、トークン数では 25~50%、タイプ数では 18~37% であるとしている。また、学習者の副詞の使用量は制約的であり、学習者の高頻度で使用されている副詞は母語話者と異なり、「たぶん」、「とても」、「あまり」であることも明らかにしている。

島崎 (2020) は I-JAS の話し言葉タスクを用いて中国語を母語とする日本語学習者の副詞の使用状況を習熟度別に分析し、中国人学習者による副詞の過剰使用と過小使用の傾向を調査した。その結果、過剰使用の副詞は「とても」、「よく」、「もし」、「一番」で、過小使用の副詞は「そう」、「こう」、「まあ」であると指摘し、またその使用傾向は習熟度が上がってもほとんど変化はなかったと説明している。

このように、これまでの研究はコーパスを使って日本語学習者と日本語母語話者の使用実態を横断的に比較し、母語話者の結果に比べて学習者の過剰使用の副詞と過小使用の副詞を考察したものが多かった。従来の研究の分析を通し、学習者が会話で使用した副詞は母語話者に比べて全体的に使用数が少なく、種類も限られており、また会話に母語話者以上に多く使用される、少なく使用される副詞があるということが明らかになった。しかしながら、これまでに縦断的観点から、大学で日本語を勉強する間に、台湾人日本語学習者の日本語の会話にどのような副詞が使用され、またそれらの副詞がどのように使用されているのかについての考察は、管見の限りでは皆無である。そこで、本研究では LARP at SCU のコーパスを使い、

台湾人日本語学習者の会話における副詞の使用を縦断的に分析し、台湾人日本語学習者の副詞の使用特徴を詳しく考察する。

3 研究方法

3.1 使用資料

本研究では台湾人日本語学習者の会話における日本語の副詞の使用実態を究明するにあたって、台湾東呉大学の日本語学科が運営する日本語習得研究プロジェクト「Language Acquisition Research Project at Soochow University」（以下、LARP at SCU）で収集した台湾人日本語学習者のインタビュー資料を分析材料とする。LARP at SCU というプロジェクトは 2004 年 3 月に始動し、当時 1 年生である 37 名の学習者に月に一回作文を書いてもらい、インタビューを受けてもらい、学習者の 3 年半の発達プロセスを長期的に観察する目的で行われた。この 3 年半に学習者の作文とインタビュー資料を計 33 回収集した。この 33 回の作文のテーマは表 1 の通りである。本研究の分析に用いるインタビュー資料は、学習者が書いた作文の内容についてのフォローアップ・インタビューの資料である。

表 1 33 回の作文のテーマ

回数	調査時間 ²	学年	作文のテーマ
1	2004. 03. 17	1 年後期	私の一日
2	2004. 04. 14		春休み
3	2004. 05. 05		私の部屋
4	2004. 06. 02		私の夢
5	2004. 06. 23		高校生活
6	2004. 09. 22	2 年前期	忘れられない出来事
7	2004. 10. 27		十年後の私
8	2004. 11. 24		もし一千万円当たったら
9	2004. 12. 08		大学生活に期待すること
10	2005. 01. 05		私と日本語の出会い
11	2005. 03. 02	2 年後期	お正月
12	2005. 04. 06		携帯電話
13	2005. 05. 04		母の日
14	2005. 05. 25		友情
15	2005. 06. 08		流行
16	2005. 09. 28	3 年前期	夏休み
17	2005. 10. 19		私の愛用品
18	2005. 11. 23		旅する
19	2005. 12. 24		選挙

² 調査時間はあくまでも目安で、その日に一斉に調査が行われたわけではない。

20	2006. 01. 04		2006 年を迎えて
21	2006. 03. 01	3 年後期	最近の出来事から
22	2006. 03. 29		スポーツ
23	2006. 04. 26		町
24	2006. 05. 24		私の愛読書
25	2006. 06. 14		最後の夏休み
26	2006. 09. 27	4 年前期	台湾のデモについて
27	2006. 10. 18		ゴミ問題
28	2006. 11. 22		台湾の外食文化
29	2006. 12. 13		コーヒー文化
30	2007. 01. 03		台湾の野良犬
31	2007. 03. 07	4 年後期	少子化
32	2007. 04. 11		大学生の恋愛観
33	2007. 05. 16		LARP に参加した感想 ³

3.2 研究対象

LARP at SCU のデータベースに 37 名の台湾人日本語学習者のデータが収録されているが、本研究では研究対象の調査期間のデータの完備、大学入学の前の日本語学習経験、留学経験の有無を考慮し、大学に入ってから日本語を習う学習者 6 と学習者 35 を研究対象⁴とした。表 2 はこの 2 名の学習者のプロフィールである。表 3 は研究対象が調査期間に受けた日本語関係の授業科目と授業時間数を示したものである。

表 2 研究対象のプロフィール

学習者	学習者 6	学習者 35
性別	女性	女性
日本語と初めて触れた時期	大学入学後	大学入学後
在学中に日本留学の経験	なし	なし

³ 調査協力者のうちの 3 名は「私が OL になったら」というテーマの作文を書いた。この 3 名は本研究の研究対象ではない。

⁴ 学習者 6 と学習者 35 の数字番号は LARP at SCU のプロジェクトに参加する学習者の番号で、本研究ではそのままの数字を使う。

表 3 研究対象が受けた日本語関係の授業科目及び授業時間数

	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次
必修 科目	初級日本語 日本語会話 1 日本語文法 1 日本語聴解 1	中級日本語 日本語会話 2 日本語文法 2 日本語作文 1 日本語聴解 2	上級日本語 日本語会話 3 日本語作文 2 日本語聴解 3 日中対訳 日本小説リ ーディング	ビジネス日 本語 日本名作リ ーディング
選択 科目	日本語発音 日本概論	日本昔話 日本歴史 日本地理	日本現世事 情 日本文化概 論 日本語学 日本近代文 学史	日本古典文 学史 新聞日本語 研究方法指 導 日本古典文 学 日本語研究 中日対訳 日本文化 日本語通訳 日本語教授 法 日本語会話 4
授業 時間数(週)	12～16 時間	13～19 時間	11～19 時間	4～24 時間

3.3 分析の手順

LARP at SCU のインタビュー資料にみられる台湾人日本語学習者の会話における副詞の使用実態を明らかにするため、本研究では次のような手順を踏んで分析を行う。

- ① 学習者 6 と学習者 35 の調査期間の 3 年半に受けた計 33 回のインタビュー資料を取り出し、「Web 茶まめ」⁵を利用して形態素解析⁶を行なう。
- ② 形態素解析後の学習者の発話結果を一文ずつ確認し、品詞の修正を行う。
- ③ エクセルのピボットテーブルを使い、学習者が毎回のインタビューに使用した副詞の語彙素⁷の種類と数を集計する。
- ④ 学習者が使用した副詞の発話文を考察する。

⁵ <https://chamame.ninjal.ac.jp>

⁶ 形態素解析を行う際、「現代語話し言葉」という辞書を指定した。

⁷ 語彙素の例を挙げると、語彙素「沢山」には書字形「たくさん」、「沢山」などが含まれており、語彙素を利用することは文字化をする際の漢字・かな変換の有無などで集計結果に影響を及ぼすことがないというメリットがあると考えられる。

4 会話における副詞の全体的な使用状況

学習者 6 と学習者 35 が調査期間の 3 年半のインタビューに使用した副詞の使用数と割合を次の表 4 に示す。表にある副詞の種類は語彙素の形で提示している。なお、紙幅の関係、この表に示した副詞の種類は使用数が 20 以上のものとし、合計は副詞の使用数が 20 未満のものも含めて計算したものである。

表 4 学習者 6 と学習者 35 の会話における副詞の使用数と割合

学習者 6			学習者 35		
副詞 ⁸	使用数	割合	副詞	使用数	割合
そう	156	27.46%	多分	103	17.46%
若し	57	10.04%	そう	70	11.86%
もう	37	6.51%	ちょっと	41	6.95%
あまり	32	5.63%	もう	39	6.61%
どう	31	5.46%	もっと	32	5.42%
全然	26	4.58%	例えば	31	5.25%
例えば	23	4.05%	まあ	28	4.75%
まあ	23	4.05%	ずっと	27	4.58%
ちょっと	21	3.70%	あまり	23	3.90%
まだ	21	3.70%	沢山	23	3.90%
			だんだん	22	3.73%
合計	568	100%	合計	590	100%

表 4 からわかるように、学習者 6 が調査期間にもっとも多く使用した副詞は「そう」で、その次は「若し」、「もう」、「あまり」の順である。一方、学習者 35 が一番多く用いたのは「多分」で、その次は「そう」、「ちょっと」、「もう」の順である。石川（2020）は I-JAS の対話タスクを利用して分析した結果、中国語母語話者の高頻度使用副詞は「そう」、「ちょっと」、「たぶん」、「とても」、「もう」という結論を得ている。石川（2020）が指摘した高頻度使用副詞のうち、特に「そう」、「ちょっと」、「もう」は学習者 6 と学習者 35 の両者の会話使用にも多く使用されており、「たぶん」は学習者 35 の高頻度使用副詞でもあるということがわかった。つまり、LARP at SCU のインタビュー資料を使用した本研究の結果は石川（2020）とほぼ同様の使用傾向にあるということが明らかになった。以下では学習者 6 と学習者 35 の会話における副詞の使用実態を個別に詳しく分析して考察する。

⁸ 副詞の語彙素を意味する。

5 学習者 6 の場合

上記の表 4 に見られるように、学習者 6 が調査期間の 3 年半に、会話で副詞の「そう」と「若し」を多く使用している。したがって、学習者 6 の調査期間における副詞の会話使用を調査するにあたって、とりわけ副詞の「そう」と「若し」に焦点を当てて考察していく。下の図 1⁹は学習者 6 の副詞の「そう」と「若し」の習得状況を示したものである。

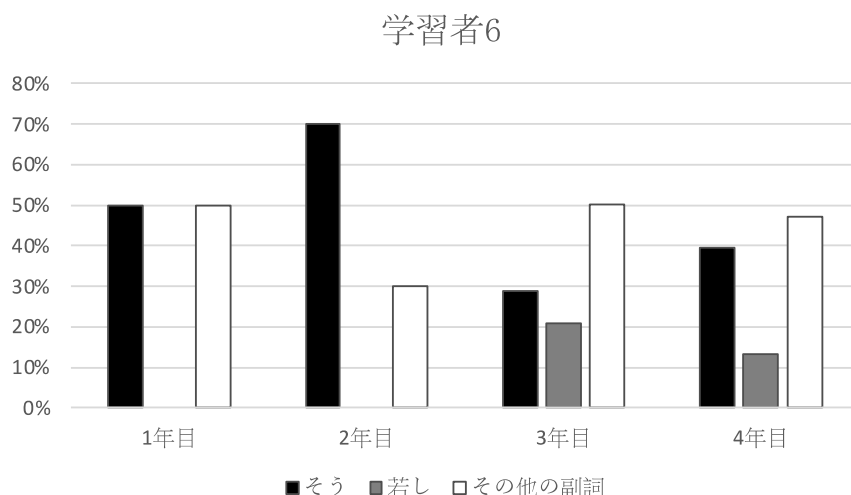


図 1 学習者 6 の会話における「そう」と「若し」の使用状況

図 1 からわかるように、「そう」は学習者 6 が日本語の学習開始 1 年目から 4 年目まで、全調査期間にわたって会話にもっとも多く見られる副詞である。但し、3 年目に入ってから「そう」の使用は著しく減少し、そのかわりに「若し」の使用は多用するようになった。以下では学習者 6 の会話における全体的な使用数がもっとも多い副詞である「そう」と「若し」の会話使用上の特徴を見ていく。

5.1 「そう」の会話使用上の特徴

学習者 6 が調査期間の 3 年半にわたって副詞「そう」を多く「そうそうそう」いうパターンで使用している。以下の例 2 と例 3 は学習者 6 の日本語学習開始の 1 年目と 3 年目のときに、インタビューの教師の発話中に学習者 6 が理解や共感を示すために「そうそうそう」のパターンであいづちを打っている例である。

⁹ 1 年目は表 1 の 1 年後期で、2 年目は 2 年前期と 2 年後期で、3 年目は 3 年前期と 3 年後期で、4 年目は 4 年前期と 4 年後期である。

例 2¹⁰

T でも（その）、そのときという表現がありますね（はい）。で、そのときは昔（はい、昔）、のことで（うん）、ですから、ここは過去形を（うん）、使わなければならないんですね（うん、そう）。思いました（うん）。或いは、おも、え、そうですね、「思いました」っていう、いいですね（うん）。そのときは、昔のことですから（うん）、必ず過去形を使わなければならないんですね（うん）。ですから、ここは大丈夫ですよ。思いました（あ、そうそうそう、分かった）。どうしてですか？

（4 回目の調査：一年生）

例 3

T えっ、もともと野球にちょっと、そんなに興味がないですから（あ、そうそうそう、じゃ私も）。はい、はい。えー、ずっと分からないままですよ。昔から今まで、野球のそのやり方（ルール）、ルール、はい、全然、規則全然分からない。

（22 回目の調査：三年生）

次の例 4 はインタビュー어의教師の質問に対し、学習者 6 が「はい、そうそうそうそうそうです」を用いて同意を示したものである。例 5 は学習者 6 が発話をしているときに、「うん、そうそうそうです」をフィラー¹¹的に使い、自分の発話権を持って発話内容を考える際の間を埋めようとしている。しかし、日本語母語話者は言葉がすぐ出てこないとき、「こう」や「まあ」を用い注意を自分の方に引きつけつつ間を埋める（石川 2020、山根 2002）。そのため、自分が発話権を握って発話中の間を埋めようとする際に、学習者 6 の「そうそうそう」の使い方は不自然に感じられてしまう。

例 4

T O さんですか？

S はい、そうそうそうそうです。じゃ先輩はお金を使って現場に出、うん、行くんですか。行かないですか？

（22 回目の調査：三年生）

例 5

S 先生はなんか授業をおしわ、うん…、教えますね（はい）。でも私はなんか、授業の後（はい）、学生がどこかへ食べ、食べに行きたいなら、私は、は連れて行って一緒に遊ぶ、遊びに行きます。うん、そうそうそうです。なんか、彼らは私の研究生です。だから私は彼らのちゅうたです。

¹⁰ 例文の内容に下線を引いたのは筆者である。以下同様。

¹¹ 「『フィラー』とは、これまで日本語で声的感動詞、間投詞、言いよどみ、つなぎの語、遊び言葉、冗長語、間投声、ヘジテーション（hesitation）などさまざまな名で呼ばれてきた現象のことである（山根 2002：4）」。

(25 回目の調査：三年生)

学習者 6 が日本語学習開始の 3 年目から、「そういう」の使用が多く見られるようになった。例 6 の「そういう風な番組」と例 7 の「そういう問題」のように、学習者 6 が「そういう」を使った言語形式で後続の名詞を修飾している。

例 6

S 家庭は？（うん、お家）父や、父がとても興味があります。そういう、そう、そういう風な番組がありますね（うんうん）。毎晩も、はい、毎晩絶対（見ます）見ます。

(19 回目の調査：三年生)

例 7

T もう慣れたから、全然そんな問題がない。

S そういう問題がないですよ。はい。

(22 回目の調査：三年生)

また、学習者 6 が例 8 と例 9 のように、「そういう」を「なんか」と組み合わせることも多く見られるようになった。適切な言葉や表現を探すときに、学習者 6 は時間稼ぎのために「そういう+なんか」、「なんか+そういう」が使えるようになっている。

例 8

T 日本では、とても厳しいそうですね。

S みんな、そういう、なんか、たいさい、せいかく？政府のせいかくを、

T 政策？（なんか）政策〔中国語で〕

(27 回目の調査：四年生)

例 9

S でも家では普通の、なんか住んでいる、ところは、なんかそういう袋を使わなければならないですよ。そして、その袋は高いと思います。

（笑）だから、ちゃんと分類しないと、なんか、たくさんのお金（無駄、無駄に使う）、うん（無駄になる）。そうそうそうです。

(27 回目の調査：四年生)

5.2 「若し」の会話使用上の特徴

学習者 6 の会話における副詞「若し」の使用は学習開始の 3 年目から多く観察されるようになった。「若し」の使用には日本語の仮定表現と一緒に使用することが多かった。以下の例 10～例 12 は学習者 6 が「若し」をそれぞれ仮定表現の「ば」、「たら」、「なら」と一緒に使用する例である。

例 10

S もし私は（はい）、なんか、妹と、うん、妹でも、弟でもいれば（はい）、その立場が奪われる、（笑）（（笑））かもしれないから（なるほど）、嫌だと思った（うん）。嫌だと思います。

（31 回目の調査：四年生）

例 11

S 感じが、しないけれども、でも、もし、私の下に（はい）もう 1 人いたら、私は、もっと、なんか、可愛がれない（可愛がられない）、可愛がられない…と思います。

（31 回目の調査：四年生）

例 12

S 子供、もし私が子供をつくるなら（はい）、必ず 2 人は欲しいです。

（31 回目の調査：四年生）

中にも、例 13 と例 14 のように「できれば」の前に「もし」をくっつけて固定化した使い方も見られる。

例 13

S うん。もしできれば、内湖[中国語で]に住みたいですよね。

（23 回目の調査：二年生）

例 14

T じゃあ、英語の大学院はどこに受かりますか？受けますか？

S もしできれば（はい）、S と、うん、要怎麼講？[中国語で]

（20 回目の調査：二年生）

また、「もし」を使って「とき」（例 15）や「場合」（例 16）のような状況説明をすることも多く観察される。

例 15

S 怒りますよ。もしその意見が分からないとき。（納得しないとき）しないとき、（怒ります）怒りますよ。

（18 回目の調査：二年生）

例 16

T そうですか。じゃ、えっと、例えば 1 ヶ月一度外で食べるという習慣、ありますか？

S まあ、もし、なんか、家庭の、家族の、私の家ではなくて、なんか母の友達とか（はい）、なんか友達とか一緒に（はい）、集まって、外食する（ああ）、場合もありますけど。でも、普通だったらないですよ。家で食べます。はい。

（31 回目の調査：四年生）

学習者 6 が使った「もし」の後続の発話には「もし」と呼応する用語がなかったという発話例も見受けられる。例 17 と例 18 はそのような例である。

例 17

S でも、もしその、台北駅（うん）、台北駅へ行って、うん、その内湖[中国語で]への MRT に乗って、そのかかるお金とか、その、時間とか、も、時間とかは、バスに乘るより（うん）、ずいぶんかかるんですよ。就是……[中国語で]

(23 回目の調査：三年生)

例 18

S うん、ふたり以上はたいへんになります、負担が、なんか、負担が重すぎると思います（はい）。もし 1 人っ子、そして 1 人っ子は、ちょっと可哀相だと（うん、寂しい）、うん、寂しいと思いますから。

(31 回目の調査：四年生)

6 学習者 35 の場合

表 4 に示された通り、学習者 35 が調査期間の 3 年半に日本語の会話に多く使用した副詞は「多分」と「そう」である。そのため、以下では「多分」と「そう」に焦点を当てて分析を行う。学習者 35 の調査期間の会話における「多分」と「そう」の使用状況を下の図 2 に示す。

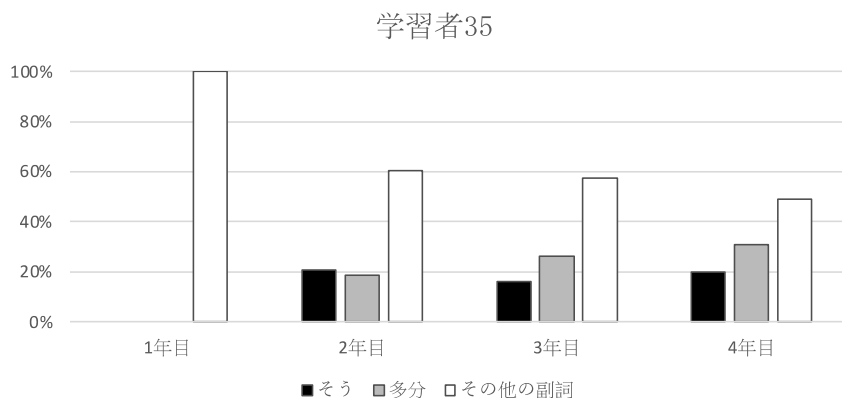


図 2 学習者 35 の会話における「多分」と「そう」の使用状況

図 2 から、学習者 35 が日本語学習の 2 年目から、会話における副詞の使用を「多分」と「そう」に集中していることが窺える。「多分」と「そう」の 2 つの副詞の使用数が総副詞の使用数に占める割合は 2 年目の 40%から、3 年目の 42%、4 年目の 51%へと増加していったことも明らかになった。以下では、学習者 35 の会話に見られる「多分」と「そう」の使用特徴を順に見ていく。

6.1 「多分」の会話使用上の特徴

学習者 35 の日本語会話に「多分」が多く観察されるようになったのは日本語学習開始の 2 年目後半からである。学習者 35 が「多分」を使って持論を展開していくことは 4 年目までも観察することができる。次の例 19～例 21 はその例である。

例 19

T もしこれが破れたり、壊れたりしても捨てないでずっとそばに置いておくという。

S はい。その時多分洗濯します。洗濯の後そばに置いておきます。

(17 回目の調査：三年生)

例 20

S えー、過ごした後、うーん、4 年生になってたぶん、えーと、仕事とか大学院とか、日本に、えーと、留学するなどのことを考えています。

(25 回目の調査：三年生)

例 21

T じゃあ、どうしてコーヒーが好きですか？

S ええー、多分、えっと、父、父の紹介でコーヒーを飲んだ後、うん、コーヒーの味が好きになりました。

(29 回目の調査：四年生)

また学習者 35 が時間（例 22 と例 23）や数量（例 24）を説明する際に「多分」を多く使用することも特徴的である。

例 22

T これは、じゃあ、一番上のお姉さんにもらった。何年ぐらい使っているんでしょう。

S えっと、多分高校時代から使っています。

(17 回目の調査：三年生)

例 23

T 伝統料理。今度はいつ帰るんですか？

S ええまだ決まっていません。（あれも、テスト終わった？）多分 10、1 月の 10 日くらい 20 日、ええと、ぐらいです。

(17 回目の調査：三年生)

例 24

T 45 人で何クラスあった？

S うーん、そのときたぶん、11のクラスがありました。

(31 回目の調査：三年生)

それから、以下の例 25～例 27 のように、学習者 35 が一発話文に「多分」を 2 回以上使って自分の意見や考え方を述べることも多く見られる。一発話文に複数の「多分」が含まれていることは不自然と感じられてしまう。

例 25

S 客観的。家族は多分私のために、いろいろ考えます。でも、えーと、友達の方が多分、んー、そんなにもっと客観的ないけんがあると思います。

(14 回目の調査：二年生)

例 26

S うーん、私はたぶん、私はガイドになりたいので、たぶん、えーと、外国へ行って、えーと、その、えーと、いろいろなことを経験する、したいです。

(25 回目の調査：三年生)

例 27

T 子供、だか、えー少子化、になってきてる。
S はい、そう、そうですよ。でもだんだんたぶんその今の生活は、なんか経済とかちょっと生活はちょっと困難になってきました（うん）。だから、えーと子供を育てるには、たくさんのお金が必要なので、でも、うーん、親はたぶん両親は何か仕事とか何、色々な理由でだから 1 人の子がたくさんいます（1 人）。1 人っ子です。
T じゃクラスメートの中にも（うん）、1 人っ子が多いかな？
S 私のクラスは、えーまあまあです。でもたぶん今の 1 年生とか高校生とかたぶんたくさんいると思います。

(31 回目の調査：四年生)

6.2 「そう」の会話使用上の特徴

学習者 35 の会話使用に「そう」が多く見られるのは日本語学習開始の 2 年目からである。学習者 35 は会話で用いた「そう」の表現の仕方が豊富で、例 28～例 31 に見られるように、学習者 35 は状況に応じて「そうです」、「そうですか」、「そうですね」、「そうですよ」をうまく操ることができる。

例 28

T うん。なんか、私の考えではやはり、洗脳されてるかもしれないですね、民進党に（はい）。今回のデモは確か中国とは関係ないですよ（うん）。でも、民進党はや、やっぱりなんか、中国人は台湾人を（はい）、いじめてるとか、そういうような言い方をしてるのはちょっと不思議ですね。
S はい、そうです。もっと、えと、えと、→そうぞく？←（うん）の、その言い方も、もう一度（うん）、言います（ああ）。それは一番最悪です。

(26 回目の調査：四年生)

例 29

T そうですね。現実社会は厳しい。厳しいからね、苦しいことも寂しいこともありますよね。

S はい、そうですか。

T ええ、どうしたらいいんでしょうね。なんか、違うことを勉強するとか。

(20 回目の調査：三年生)

例 30

S はい、だから、私は毎日、えっと、えっと、まち、街を歩いているとき、と、かわいい赤ちゃんを見ると、かわいい（ねえ）、かわいいと思います。

T いい肌だね。

S はい、そうですね。

(22 回目の調査：三年生)

例 31

T 日本ではそうなんだけど。台湾でもそうかな？

S はい、そうですよ。

(31 回目の調査：四年生)

前述した学習者 6 の「そうそうそう」のパターンは学習者 35 の会話使用にはほぼ観察されなかった。また、全体的には学習者 35 は学習者 6 と比べてうまく状況に応じて終助詞「か」「ね」「よ」を付け加えて使用できると言えよう。

7 考察

学習者 6 が調査期間の 3 年半に会話で多く使用した副詞は「そう」と「若し」である。日本語学習開始の 1 年目と 2 年目に特に「そう」が多く使用されている。中でも「そうそうそう」のパターンが特徴的である。これは発話権が相手にあるときにも、発話権が自分にあるときにも観察された。目上のインタビュー어의発話中にあいづちとして「そうそうそう」を使ったことは強い同意の表明である反面、丁寧さに欠ける不適切な使い方だと感じられる。また、「そういう」を用いた言語形式で後続名詞を修飾することは学習開始の 3 年目から見られるようになった。それから、適切な語句や表現を探して時間を稼ぐためのフィラー的な用法は、「そうそうそう」パターンの使用から「そういう+なんか」や「なんか+そういう」の使用へと変化していったことも観察できた。さらに、日本語学習の 3 年目から学習者 6 の発話に「若し」の使用が多く見られるようになった。学習者 6 が用いた「若し」は假定表現（ば、たら、なら）や状況用語（とき、場合）と呼応していることが多かったが、呼応する用語のなかった発話例も少なくなく観察された。中には「できれば」の前に必ず「若し」が付く、「もしできれば」というパターン化の使い方も観察された。学習者 6 の「若し」の会話使用が 3 年目に多くなったのは学習者 6 の日本語能力があ

る程度上達し、日本語で自分の考えや意見が述べられるようになったためであろう。

一方、学習者 35 が日本語学習開始の 2 年目から副詞の「多分」と「そう」を会話で多く使用するようになった。学習者 35 の「多分」は自分の意見を伝える、時間と数量を述べる際に、よく使用されている。但し、一発話に複数の「多分」が使用されることはやはり不自然に聞こえる。学習者 35 の「そう」の使い方は、同様に調査期間に「そう」が多く使用された学習者 6 に比べて多様で、学習者 35 はうまく状況に応じて「よ」や「ね」などの終助詞を付け加えることによって自分の心的態度を示すことができるということも明らかになった。

以上の調査結果からわかるように、学習者 6 と学習者 35 が調査期間の 3 年半に日本語の会話で使った副詞はかなり集中しており、学習者 6 は「そう」と「若し」で、学習者 35 は「多分」と「そう」である。学習者 6 の「そう」「若し」と学習者 35 の「多分」「そう」の使用数は共に学習者 6 と学習者 35 の全体副詞の使用数の 3 分の 1 以上にも達していることがわかった。

学習者 6 と学習者 35 の調査期間全体の会話に「そう」が多く観察されたのは、本研究の調査に使用した資料は LARP at SCU のインタビュー資料であることに大きく関わっていると思われる。しかし、同様に調査期間に「そう」が多く観察された学習者 6 と学習者 35 の使い方にも異なる特徴があることがわかった。学習者 6 の「そうそうそう」の際立った使い方、「そういう」の使用変化と、学習者 35 の多様な終助詞と組み合わせた「そう」の使い方は、本研究の調査を通してからはじめて明らかになったことである。

調査期間の会話資料に多く見られた副詞は「そう」のほかに、学習者 6 は「若し」であり、学習者 35 は「多分」である。この 2 つの副詞は学習者の日本語学習開始の 2 年目後半か 3 年目から多く使用されるようになった。学習者がこの時期、すなわち中上級の段階に入ると、やっと日本語で自分の考えや意見が述べられるようになり、「若し」と「多分」を使って意見表明ををすると思われる。学習者の会話に用いた「若し」と「多分」には呼応する言い方がなく、自己主張の前触れのように使用されることも多くあると本研究の調査からわかった。

「学習者に『たぶん』『もし』のような呼応の副詞が多いのは、その文が非現実であることを早めに伝えてしまおうという気持ちの表れとも考えられる(中俣 2016 : 28)」。学習者 6 と学習者 35 の会話における「若し」と「多分」の使用は母語である中国語からの影響(「仮設、如果」と「大概、或許」)も受けていると考えられる。例えば、学習者 6 の会話に現れた「もし〜とき」、「もし〜場合」と、学習者 35 の会話に見られた時間と数量を示す前に「多分」を使った言い方は、学習者の母語である中国語からの負の転移だと思われる。

「若し」と「多分」はともに意見表明をするための使い方でありながら、「若し」を使って積極的に場面状況を提示する学習者 6 と、「多分」を用いて自分の意見や考えをぼかして述べる学習者 35 との、意見表明の使用特徴の相違がはっきり見られる。以上のことを含めて言うと、日本語の会話の中における「若し」と「多分」の多用と使用選択は学習者の母語である

中国語からの影響もあり、話者個人の意見表明のスタイルにも大きく関与していると考えられよう。

8 まとめと今後の課題

本研究の目的は、台湾人日本語学習者が日本語の会話でどのような副詞を多く使用し、またその使用にどのような特徴が見られるかを縦断的に調査することである。これを解明するにあたって、本研究では大学入学の前に日本語学習経験がなく、大学に入ってから日本語を習う 2 名の学習者を研究対象とした。以下では、本研究が明らかにしたことをまとめる。

この 2 名の台湾人日本語学習者が調査期間の 3 年半に、日本語の会話で用いた副詞はかなり集中しており、学習者 6 は「そう」と「若し」で、学習者 35 は「多分」と「そう」である。この 2 名の台湾人日本語学習者の日本語会話に共通して多く観察された「そう」は使用資料であるインタビューの形式に大きく関わっていると思われるが、この 2 名の使い方には「そうそうそう」の際立った使い方、「そういう」の使用変化と、うまく多様な終助詞と組み合わせた「そう」の使い方があることも観察された。また、この 2 名の台湾人日本語学習者が日本語学習開始の 2 年目後半か 3 年目から、それぞれ「若し」と「多分」を多く使用するようになった。「若し」と「多分」の多用は、学習者の日本語能力が向上し、日本語で意見表明ができるようになり、日本語の表現に母語である中国語からの影響を受けているためであると考えられる。本研究の調査結果から、「若し」を使って積極的に場面状況を提示した学習者 6 と、「多分」を用いて自分の主張を弱めて述べる学習者 35 の様子が窺われたため、日本語の会話に見られた学習者の「若し」と「多分」の使用は話者個人の意見表明のスタイルにも大きく関わっていると考えられる。

本研究のような少人数の学習者を対象として長期間にわたって記述していく縦断研究は、個人差などの影響を受けやすく、結果を一般化することが難しいという短所があるが、その反面、大きな集団を対象に特定の一時期に行う横断研究が観察できない被験者のある一定期間の言語の実態を提示できるという長所もある（迫田 2008）。本研究がこの 2 名の台湾人日本語学習者の 3 年間半の日本語学習期間の副詞の会話使用を観察し、それらの副詞の習得過程を明らかにしつつ、副詞の過剰使用の状況も考察してみた。この 2 名の台湾人日本語学習者の日本語会話における副詞の過剰使用は、場合によっては日本語母語話者の誤解を招いてしまう危険性もある。ネウストブニー（1995）が述べたように、日本語を使用する外国人は日本人の話し手から「外国人話者」というラベルを貼られてしまい、平等に扱われない理由は外国人が日本語らしくない言葉遣いを使用しているためである。そのため、本研究が明らかにした台湾人日本語学習者の会話における副詞の過剰使用は、会話の授業で学習者に対して注意を促す必要があると考えられる。

本研究では台湾人日本語学習者の日本語会話における副詞の使用を調査したが、今後同じ学習者を対象とし、彼らの日本語学習の 3 年半に書いた日本語の作文に使用した副詞を分析し、台湾人日本語学習者の日本語の副詞使用の全貌を明らかにする。

参考文献

- 石川慎太郎 (2020) 「発話における副詞の使用」『日本語学習者コーパス I-JAS 入門 研究・教育にどう使うか』pp. 167-184 くろしお
- 小寺里香 (2001) 「初級～中級学習者の発話にみられる副詞の使用について」『岐阜大学留学生センター紀要』2000, pp. 76-89
- 迫田久美子 (2008) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 島崎英香 (2019) 「話し言葉における日本語学習者の副詞の使用実態-I-JAS を用いて韓国語話者を中心に-」『日本語・日本語教育』3, pp. 65-84
- 島崎英香 (2020) 「中国語を母語とする日本語学習者の話し言葉における副詞の使用傾向：I-JAS を用いて習熟度別に」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』5, pp. 20-32
- 中田智子 (1991) 「談話における副詞のはたらき」『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』pp. 81-108 国立国語研究所
- 中俣尚己 (2016) 「学習者と母語話者の使用語彙の違い-『日中 Skype 会話コーパス』を用いて-」『日本語／日本語教育研究』7, pp. 21-34
- ネウストプニー, J. V. (1995) 「第 8 章 接触場面の研究について」『新しい日本語教育のために』pp. 185-209 大修館書店
- 森山卓郎 (2003) 『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房
- 畠郁 (1991) 「副詞論の系譜」『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』pp. 1-64 国立国語研究所
- 朴秀娟 (2017) 「『とても』における日本語学習者と日本語母語話者の使用実態の違い-話し言葉を中心に-」『日本語／日本語教育研究』8, pp. 101-121
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

参考資料

- 『LARP at SCU コーパス第 2 版』(2011) 東呉大学日本語学科
(https://web-ch.scu.edu.tw/japanese/web_page/3936)

付記

本研究の成果は 108 年度科技部專題研究「LARP at SCU 語料庫之線上檢索平台建置及其應用研究（Ⅱ）（MOST108-2410-H-031-035-MY2）」及び 110 年度科技部專題研究「LARP at SCU 語料庫之線上檢索平台建置及其應用研究（Ⅲ）（MOST110-2410-H-031-034）」の一部である。

本論文 於 2022 年 3 月 11 日到稿，2022 年 6 月 8 日通過審查。